

記(坐) 44245° 紀上 102° 青山村 88° 紀上 103° 紀(坐) 45° 紀上 96° 88° 1~3斤, 未3斤 2,176° - 1/2  
記(坐) 44245° 紀上 102° 青山村 88° 紀上 103° 紀(坐) 45° 紀上 96° 88° 1~3斤, 未3斤 2,176° - 1/2

①4 網友價 52'

④ 2633  
2751

## 第三十四章　日御子の哀れみ、そして死

反ひ月読尊凸と、己素戔嗚尊凸との間に、ハ  
ヨリよもつて埋めようのない大きな溝が出来  
てしまつた。  
素戔嗚尊は、ハ握鬚頭角を搖すりて啼きゆ  
めりて怒り狂い、青山を枯山に変すほど  
いた。(記・紀)  
(草木の枯れた山)  
ハキハチに阿姫に申し上げて、御裁断を  
ああぐことにしてよう。  
素戔嗚尊はこう言うと、蛇と連らなる大  
軍を率いて、天に参昇して、山川はこ  
とてしまた。

素戔鳴尊の上洛

梯鶴のことは  
さかまく方から

紀上104<sup>P</sup>行には  
3.「吾が弟の末子とはー」とある

2.176<sup>P</sup> - 2/2

紀上104 3斤 紀上104<sup>8</sup> 記(黑)45

↑ 20, 25 級上103未<sup>ノ</sup> 級小72 既(異)45<sup>9</sup>



H4.2.2(回)休2回  
H10.9.1(用)

纪上88未行  
未行未3行

2.178 P

紀上 88<sup>3</sup> 157

紀上 104<sup>9</sup>, 紀小 73<sup>1</sup>

~~Sept 104?~~

続 3  
だか、天照大神は、素戔嗚尊が勇悍くて、すこしあたけ  
安忍（残忍）なる一面があり、また性悪くして、  
て、残り傷る所多々ことを知つておられたの  
で、邪馬台国（やまつちくに）の都（みやこ）の内には、素戔嗚尊を一步  
たりともお入れにならなかつた。（神代紀、  
第五段、本文、一書第二參照）  
こうして、天照大神と素戔嗚尊との対立が  
11  
て  
い  
つ  
た。

あまりにも小さなようと思われます。  
うではありますまい。もつとも、力づくで領  
土を拡大するニとほ倭國の爲になりますまい  
やここで、姉上(あねうえ)の御判断(ごはんじだん)をあおごうと思  
や霧(きり)を跋涉(ばっしょく)して、遠路(えんじゆ)はるばる参上(あねうえ)いた  
です。されなのに、姉上(あねうえ)は、私の言ひ分(ことぶき)を聞  
こうともなさらないのですね。阿姉(あね)とか  
そんなどまでも起(おき)ておいでだとほ思  
つても、いませんとでいたし  
と仰(おあ)せられた。(神代紀(じみだいき)上(じょう)第六段(だいろくだん)本文(ほんぶん)参照(あらたん))

ひとりみ元 あり 父親 34  
独身 1881

24

2.179<sup>P</sup> - 1/2

73 元 1504  
辛巳

㊁ 二 171<sup>9</sup>/<sub>3</sub> 拝候の如

2,179<sup>7</sup> - 3/2

万②-387<sup>P</sup> (果) 広1795下 <sup>1210245</sup> ~~西海紀上336~~ <sup>P</sup> 1行  
二<sup>8</sup> 海北 一海を隔てて <sup>12152-2/3</sup>

須佐の大敵④2424  
紀ト「新嘗の御殿たくそと  
られ」武劉と同様に濡小衣である。

宋建炎三年  
纪上 1127  
纪小 7717

第3 三日天(第)1-114<sup>P</sup> 魏支集 53<sup>P</sup>

北史

同文  
1914-3/4 東洋文庫 65  
P2030

女王の出現 小林302

二八 287259

● これは、正始八年（二四七）ある  
● 日御子（第二代目の神功皇后）はお元くな  
りになつた。

● 魏志倭人伝に、  
「卑彌呼以つて死す。大に冢を作らる  
百餘步。云々」

● 唐代の李延壽（生没不詳）によつて撰せら  
れた日本北史（二十四史の一つ。北朝の魏・  
周・隋の歴史を一つにまとめたもの。）  
○ 卷）に、  
「正始中、卑彌呼死す」

● とある。  
○ 正始中は魏の齊王芳の年号（二四〇）二  
四八（）である。

● 北史のこの「正始中、卑彌呼死す」という記  
事か、も一確実な記録にものであ  
る。

日本本居 235<sup>P</sup> ねづらう  
魏志倭人伝 172<sup>P</sup> おほひょうにこらえじと 2,182<sup>P</sup>

甲 1.914.2.4/4  
吉 1.914.2.4/4

三国志 第二回 223<sup>P</sup> 紀小77<sup>P</sup> 下  
魏志倭人伝 126<sup>P</sup> 126<sup>P</sup> 126<sup>P</sup> 2,165<sup>P</sup>  
乙 1.914.2.4/4  
丙 1.914.2.4/4

正始九年(二四八)から正始十年(二四九)は、四月に  
王国の出現し小林行雄、文英堂、三〇二貢参考  
照(せり)  
尚(なが)、翌年(二五〇)の正始十年(二四九)は、四月に  
嘉平(かへい)と改元される。(「三国志」魏書、  
齊王紀、嘉平元年四月八日条参照)

米(べし)  
今水にて、唐代の書である北史(ほくし)に  
どうして(メのよう)の魏志倭人伝(いわじんてん)をはじめとする諸

史料(しり)に見らるない重要な内容(なよう)が掲載(けいさい)されて

・唐代の李延壽(りえんじゅ)が、勝手に捏造(ねつぞう)したのだろう

いや、あるのは、魚豢(ぎょかん)の『魏略』(ぎりやく)が、  
かって(かって)ある。『魏略』(ぎりやく)は、

既述(じじゆ)  
も存在(ぞな在)してりたことを示(し)してゐるのかも知(し)れ  
ない。(第二十八章へ見開録の項において)

米

八百重  
己酉支  
所  
云  
407  
天之改行  
改行  
2011.11.13  
P

2.183 P

大河 790  
御は御に面  
御支落 53  
2188-Y2 9~10 59

魔王立つ

魏志倭人伝

「卑彌呼以つて死す。大川に冢を作ス。」  
百餘歩、徇葬する者、奴婢百餘人。更に魔王  
を立つ。も、國中服せ。更に相誅殺し、當  
時千餘人を殺す。云々

とある。

「尚、  
卑彌呼が死んだとき、  
邪馬台國の王と  
なつたのは、  
卑彌呼が王位についた」ということを暗示し  
て、  
天照大神は、以て高天原を治すべし。  
天照大神は、以て天下を治すべし。  
讀尊は、以て蒼海原の潮の八百重を治すべし。  
第五段、一書第六段、  
素戔鳴尊は、以て天照大神は、以て天下を治すべし。  
素戔鳴尊は、以て蒼海原の潮の八百重を治すべし。  
素戔鳴尊は、以て天照大神は、以て天下を治すべし。  
第五段、一書第六段、  
其の父母の二の神、

「天照大神は、以て天下を治すべし。  
素戔鳴尊は、以て蒼海原の潮の八百重を治すべし。  
讀尊は、以て蒼海原の潮の八百重を治すべし。  
第五段、一書第六段、  
其の父母の二の神、

2,184<sup>P</sup>

ok

499

はく、口、其、た無道し。以て宇宙に君臨た。  
るべからず。固に當に遠く根国(今の難波)あり。遂に逐ひきし(神代紀上第五段、本文)。  
たりのとてであらう)に通ぬ(行か)とのたまひて  
と記載されしるべ。  
恐らく、  
へ素交鳴傳は、一時(天下)を治めたが、その無道な所業故に(宇宙)に君臨たる  
へからず(と)され、倭国(九州)から追放され  
た。宣告  
とくらべてのであらう。  
一か一、その後、  
へ素交鳴傳は、口母の根国(とくべつ)の當初の出雲  
國下現在の近畿地方の難波(あわの)を中心とす  
帶に到り、一(この地)天下(あめの)を支配する  
とになる。とくらべてのであらう。  
と想察され。詳細については、追(おと)り追(おと)り述べてゆきたい。

立候元 1653<sup>丁</sup>  
立候元 1653<sup>丁</sup>

7. 10月20日  
Poj 姉  
以上 104

古墳の裏垣  
森浩一 92Pの実  
185  
古墳の表土の壳  
森浩一 ⑤1453

古墳の発掘 森浩-92<sup>3</sup> ④2362-1号  
マロ銀す鑿先品を中で 敷地内(1) 100  
32頁の図版 051 10-1899 ~~1-1~~ 1-1

3, 105

右へ車籠呼のことを以て日本書紀に記され  
てゐるの御陵の全長は、二七ハメである。  
なあ、平城宮の西北方、佐紀にある神功皇  
后の御陵とすると一三五メートル余、全長  
二百余步(二七メートル)である。巨大的な高  
塚である。余は、円丘部が、径百余步(一  
歩を一メートル)である。御子の死を悲し  
かつて見夫ことかない程大きな塚を作つて  
た。僕大な日御子の死を悲しむ人々は、  
かづて見夫ことかない程大きな塚を作つて  
た。

次第 159  
第 193 因入摸山周山地圖

聖經

目~~キ~~

甲 2,192<sup>9</sup> 写真

双坡村 698<sup>P</sup> - 6/2

十一

よ  
う  
な  
形  
で  
あ  
る  
。

妊  
婦  
の  
腹  
部  
と  
頭  
部  
と  
さ

小  
丘  
口  
横  
山  
山  
の  
山  
頂  
は  
下  
二  
つ  
の  
腕  
を  
伏  
せ  
た

193  
四  
横  
山  
周  
辺  
加  
四  
参  
照  
)

の塚は、大倭國（肥後國）の合志原の  
都の外郭城内へ西北隅に位置する古横  
山（一五尺）の頂上に作られた  
と仮定して蓋をすすめてゆきたい。（第13回）

2,186

「小、DT」104°F

5. その徑白余歩の場を造るのだとた。

（＊）もともと、徑白余歩（よほ）が、底面の直徑（ちよつけい）を示して、このかべへはつまつりしなり。

一歩から対向（たいこう）位置まで、墳丘（ふんきゅう）上（うえ）を歩（ある）いた長さ（ながさ）につけた、

このかべへはつまつりしなり。

横山の北側を削ったが H17.3.16午後のことだ。書いてある。  
どうかついで尋ねたり。山東小学校に土は碎選するぞ!

起伏の少す  
走る

○ 横山頂

上の

山の

二上

山の

上山

の

北側

一帶

全面

が

下ままで傾角度がほほ一定だから、自

なりの急勾配になつて、一方も上から

見え

。一の急坂の下へ人為性を思ふ。

見え

。木の北側部分を削り取つたのでは

。木

参考までに、予め述べておきた二三点があ  
る。

「**腹**部の**大**きな**女**人の**姿**を**一**た**場**の**腰**に**石**」  
と**二**二**人**で**お****き**、  
後の**開**胎**ト**ニの**石**を**押**一**開**キ**ト**産道**（**羨**道****）**  
から**出**生**ト**た**子**々**ヘ**加**位****ト**と**名**と**名****ト**と**年****ト**  
と**承**け**せ**る  
と**い**う**司**天石窟**（**儀式**）**を**執**と  
り行**な**つ**ト**、**左**の**窟****（**だ**）**  
（**神**功**）****摸**政**（**う**）****前**紀**。**神代紀上第七段**（**天石窟**）**

2,189 P

秋葉神社

字アキ	(ア) <small>596</small> 空の西北の隅は、 とも人目につかない場所の意であり、詩	字アキ	(ア) な、お、 秋葉へ火難 <sup>かなん</sup> よけの神 <sup>かみ</sup> などが多い <sup>い</sup> て庵 <sup>庵</sup>
字アキ	(ア) <small>596</small> 二一四二一六頁。他参照	字アキ	(ア) 屋敷内に祭る神 <sup>かみ</sup> の二とてあ ・熊野・神明へ天照大神 <sup>あまてらすおほみかみ</sup> 同
字アキ	(ア) <small>596</small> 二一四二一六頁。他参照	字アキ	(ア) な、お、 秋葉へ火難 <sup>かなん</sup> よけの神 <sup>かみ</sup> などが多い <sup>い</sup> て庵 <sup>庵</sup>
字アキ	(ア) <small>596</small> 二一四二一六頁。他参照	字アキ	(ア) な、お、 秋葉へ火難 <sup>かなん</sup> よけの神 <sup>かみ</sup> などが多い <sup>い</sup> て庵 <sup>庵</sup>
字アキ	(ア) <small>596</small> 二一四二一六頁。他参照	字アキ	(ア) な、お、 秋葉へ火難 <sup>かなん</sup> よけの神 <sup>かみ</sup> などが多い <sup>い</sup> て庵 <sup>庵</sup>

「ヒ」「う」であります。  
干と連う。

135  
G  
M  
1

1字アキ  
そ 一 な い に 一 人 で い 7 も 1 く に あ 3 人 は 1 人 の 見 み て い な い 魁 が く の 部 屋 へ ど

（一）波和辞典 小林信明『小学館』  
ヒ あ る。  
（二）君子屋漏參照  
ヒ あ る。  
（三）君子屋漏參照  
ヒ あ る。

四百年ばかりの年月が流れ小たころ、聖徳太子の意に向に沿つて、神功皇后の御陵も畿内へ移さざるをえなくなつた、と想察される。(第)

一表参照  
・ そんとキ、  
邪馬國の古の都を慕  
（あめとくに）  
（ヤマコ）  
（リヤク）  
（みやこ）  
（モリカ）

は  
「平城宮の西北方の地に、神功皇后の御陵  
をお邊りいたいし  
と切望いたのではなかろうか。  
」ういたわけで、平城宮の西北方回佐紀の

2,191 P 2/3

神功皇后陵 2,982.5m 上



コピー  
④2215右有3

④2215右の裏  
新有3

④2215  
おかか・ひょーと二和田

・カラー  
・右の上粉ト  
塊戴下311.

13QG 14QG 写真図版 371 神功皇后陵 (五社神古墳)

『朝日新聞』平成23年1月7日付〈初めての立ち入り調査〉参照  
506

やまと ④ 2362<sup>P</sup> 橋の二ヒ  
「小山」 ⑤ 5696<sup>P</sup> 小野宮室 ⑥ 5372<sup>P</sup> 2.19 2<sup>P</sup>

。カラ一

。左頁の右上(左頁)に掲載X下さい。



372

14QG

写真図版 372 横山の二上の山頂

12QG (西北の山頂處から東南の山頂部を望む)

11SG 著者撮影

南3059<sup>2</sup> 14キ

漆原の與神宮は筒川村へ移出、--- そのまじ筒川に祀られていた豊神の祭室が 筒神社内へ移されたのか?

小野小町 (2枚) 104°, 111°, 296°  
5 file 2193° (由 5372°  
由 5380°  
由 5386°, 104°

2k

2, 193 P

〔④〕 **邪馬台國** の古京の西北隅に位置すると思ふ。  
この丘の小丘、横山丘の麓には、指定村社

と推察され。神功皇后の御陵が築造されたのだろう。

・すなわち、  
へ平城宮から見て西北方に造られた神功  
丘陵相当するのは、  
合志原の孤丘、横山の山頂、肥後国  
並らび立てて、二上山丘である。

この物語では考えてみた。)(

と、  
人並らび立てて、二上山丘である。

丘陵相当するのは、  
合志原の孤丘、横山の山頂、肥後国  
並らび立てて、二上山丘である。

12. 13. 図。写真図版。前頁。前頁。  
371  
372 参照)

國の合志原へ流されてきたものと思われる。

百科④-401<sup>1</sup>  
5368<sup>12.5</sup>承和5年未承和6年正月

父小野篁が隠岐島へ流され小野の子とほほ山に

大神ニテ、田心弘仁十四年（ハニハ）十二月十五日に

城宮の西北方佐紀の丘へ遷土小た。天照大御子

（ハニハ）三月終に帰洛の勅命を蒙る

（ハニハ）と云ふ。七国神社本殿の額へ由緒書き参

（ハニハ）を起し、七ヶ所の靈社を合せ祭り、承和七年

（ハニハ）は、義理を負ふ。仁明天皇の承和年間（ハニハ）

（ハニハ）の爲め罪を償へ、当小野の里へ流され小てキタ。

（ハニハ）の父が詫免者（あ）ざまに告げ口する人

（ハニハ）が詫免者（あ）ざまに告げ口する人

$$2.194^p - \cancel{\frac{3}{2}} \quad \text{⑦} 2194^p \quad \text{⑧} 5369^p \quad \text{⑨} 5372^p \quad + \text{ 小数} \quad 171^p$$

⑤ 小野篁の子・良実は、~~謀免者~~の爲め罪を得て遠く(島流し)へ流され、當小野の里に謫居の罪を受けた。とことなりと、~~島流し~~の流され小島の場所を上り、~~無量の新豊を起~~てやがて~~か~~靈社を合せ祭り(うらない)へ配在した。

たとえいと到つたのであろう。

⑥ あれども何と早くも、父小野篁は、承和七年(ハ四〇)二月十四日に都へ召された。

⑦ こうして、たわけで、その直後の承和七年(ハ四〇)三月に、良実も歸洛の勅命を蒙つた、(ハ四〇)と推察される。

\* 詳細については、第九十四章において考案した。

合志原の外郭城西北隅角部の小丘に位置する横山に  
二つの塚を伏せて並らべたような二上の塚へ徑  
百余歩の塚)が、次第に形作られていつた。  
口女人の姿凸かく大空のなかに浮かび上かつた。  
タの間、都の内はただしんと静まり返つて  
途方もなく大きくなつた。  
涙をふり払つて見上げると、山の上には  
易に山陵を築くことが出来たであろう、と容  
易のならば、一土盛りするよりもずつと容  
易に山頂部を削り、去り難いに漂つてりた  
思ひかる。  
こうしてついに、徑百余歩の塚は、その形  
にあつて、完成の時を迎えた。  
けれども、今は未だ、その塚はただの土塊  
で、いかなかつた。  
この土の丘に生き命を注ぎ込まなければ

ならぬのである。

④2199  
ルルルル  
ルルルル

} えがたび

「玄室」玄2219-14未重立 古漢 広? 古85? 記(西)37,39?  
田227? 2の27 328 殿陰子 1612 記(西)39? 案26 2,1977

紙84P「隊」= 隊  
85P注  
68P  
題 2924  
719

古事記集 26  
三二

2,198<sup>P</sup>

この物語ではとりあえず、  
あつたろう。』  
と解いて述べてやった。

\*



2264<sup>181211</sup> 23 1121<sup>23</sup>

地結め元行け

2,200P. - 1/2

698<sup>6/6</sup>  
2190<sup>2/15</sup>

少ない双脚輪状又ハ二つの脚をもつた輪のよ  
うな文様)が描かれたりが現在石柱は  
移転され、他日の復原の日を待つていろ、と  
いう。○熊本の装飾古墳(松本雅明、熊本  
日日新聞社、一〇八頁参照)  
弟○田へ横山周辺地図中の横山古墳  
米  
さて、邪馬台国(ヤマトノクニ)の都(ヤマトノミササギ)の外郭城西北隅の二の  
二上(ツカミ)の山(横山頂上部)は、清淨に清めらるゝ  
いよいよ生(ヨリヨリ)命(ヨリヨリ)を得(ヨリヨリ)る時(ヨリヨリ)を待(ヨリヨリ)つばかりとなつた  
注連縄(ツチヌイ)が張(ヨリヨリ)り渡(ヨリヨリ)されており、注連縄(ツチヌイ)の処(ヨリヨリ)々々に結(ヨリヨリ)わ  
え付けられてゐる白(ヨリヨリ)い四手(ヨリヨリ)が風(ヨリヨリ)トテヨリハ  
部(前部)と腹(後部)との境(ヨリヨリ)界(ヨリヨリ)ありたり(ノリヨリ)  
子(ノリヨリ)天浮梯(アマスカシキ)立(タチ)て、胸(ノリヨリ)部(ノリヨリ)を成(ヨリヨリ)す丘(ヨリヨリ)のくびれ部(ノリヨリ)に  
凹(ノリヨリ)か(ノリヨリ)立(タチ)て、うれ(ノリヨリ)梯(ノリヨリ)の真(ノリヨリ)下(ノリヨリ)に据(ノリヨリ)梯(ノリヨリ)  
頭(ノリヨリ)部(ノリヨリ)と腹(後部)のくびれ部(ノリヨリ)に  
子(ノリヨリ)天浮梯(アマスカシキ)立(タチ)て、胸(ノリヨリ)部(ノリヨリ)を成(ヨリヨリ)す丘(ヨリヨリ)のくびれ部(ノリヨリ)  
凹(ノリヨリ)か(ノリヨリ)立(タチ)て、うれ(ノリヨリ)梯(ノリヨリ)の真(ノリヨリ)下(ノリヨリ)に据(ノリヨリ)梯(ノリヨリ)  
る(ノリヨリ)

日本古墳100選64  
河井昭147 (2)唱う元1611  
この頃  
(2)

2.200-2/2

紀上80<sup>th</sup>注11  
当時(2)2199  
2月

え置かれている

大きな基

大甕

か海水で満たされた。

条参照

なお、

「ウキハシは、普通、多數の舟を並べて上

に板を置いた橋の事であるが、しきりには、コハシは梯の意味である。  
 界といふ觀念があり、天地の間に梯子をかけて往来する。  
 たのううし

と、(上)日本古典文学大系  
 岩波書店、八〇頁、注十一参照)

□(2)

参考迄に述べると、

「かねてより唱えられていた(前)前方部祭壇  
 説(2)を補強するよう考古学上の成果が得ら

と、(上)日本古典文学大系  
 岩波書店、八〇頁、注十一参照)

参考迄に述べると、

「かねてより唱えられていた(前)前方部祭壇  
 説(2)を補強するよう考古学上の成果が得ら

と、(上)日本古典文学大系  
 岩波書店、八〇頁、注十一参照)

参考迄に述べると、

「かねてより唱えられていた(前)前方部祭壇  
 説(2)を補強するよう考古学上の成果が得ら

と、(上)日本古典文学大系  
 岩波書店、八〇頁、注十一参照)

段々状況

12.8M

「アーティスト」 井澤一文庫  
古墳の実相 Sfile ④2201 P  
38 P ④2211 P

201' 2.201 - 1/4

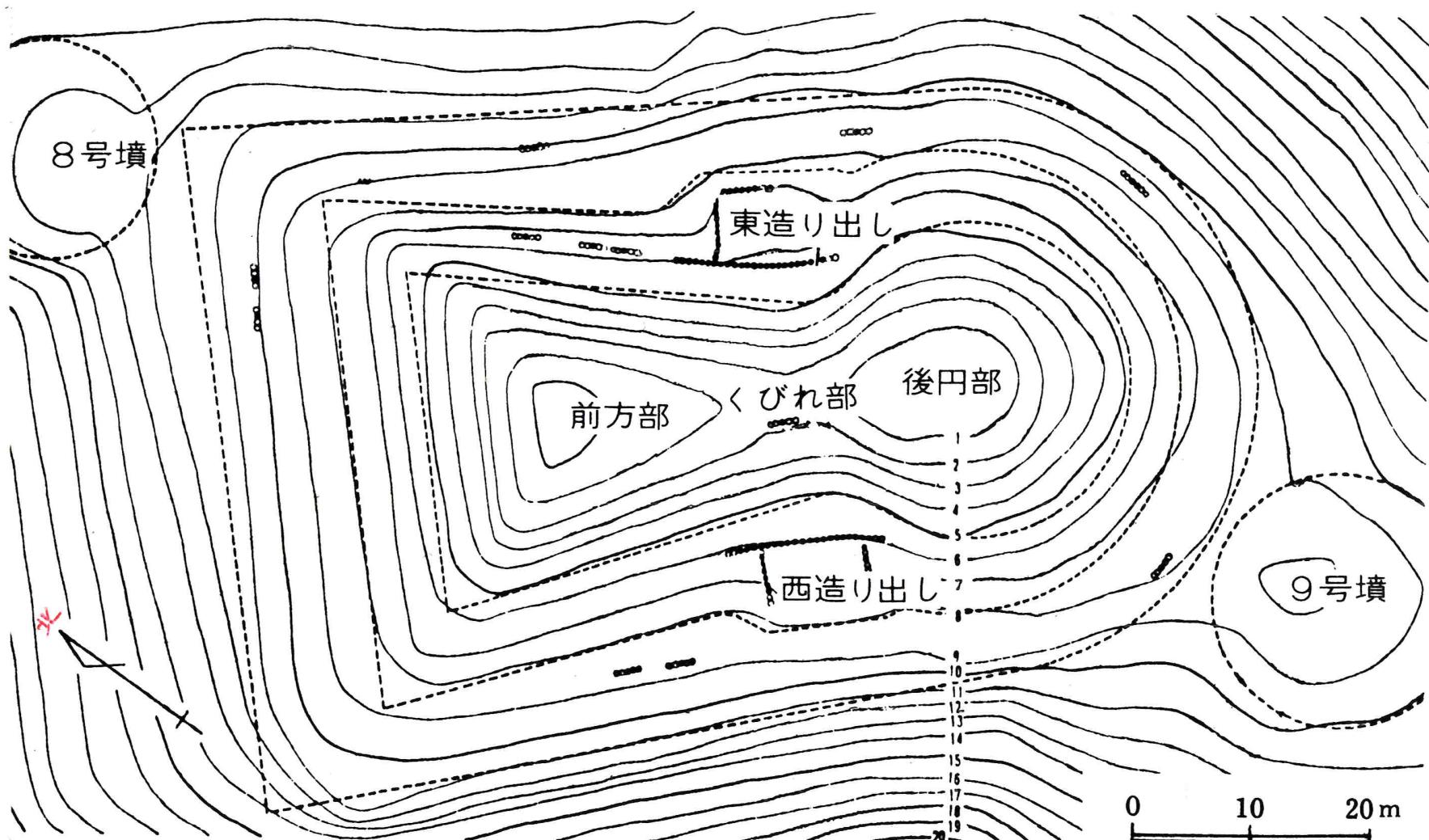
はのば  
箸墓 紀上247<sup>7</sup>注20 大カニク 4/2<sup>9</sup>

おり、前方部は先端が三昧線のバチ形に開く構造で二段に築かれてる。古墳上での祭りの最古例として注目されてる。113 口祭祀遺構口は、前方部の二段目で見つかった。祭りに使われる器台や高壇などの土器片が十数点まとまつて出土。壙丘築造後に行なった祭りの跡とみられる。土器は、布留式土器（古墳時代初め）が一怎のほか、庄内式土器（弥生時代末期）であつて、これらは古墳は築墓と並ぶ最古級の前方後円墳である。このとが分かった。と云う。へ、朝日新聞、平成十五年九月二十五日付へ前文部に祭り跡（参照）。

② また、和歌山市の中辺八幡山古墳（埴輪終末期）では、前方後円墳のくびれ部の突出部分である口造り出入口において、祭りが行われたようである。（第315回参照）

（東・西の造り出入口部分に、円筒形埴輪

2.201P-2/4



井辺八幡山古墳の墳丘復原図と円筒埴輪の位置

拠「井辺八幡山古墳」

1309

「埴輪」伊達宗泰、保育社、昭和53年3月5日発行、51頁参照。

井田八幡山古墳 319<sup>号</sup>  
 ④ 2200-1/2 1斤  
 1972年6月1日  
 2,201-3/4

種の埴輪で方形の区画をつくっており、今から名  
 乗車輪で方形の区画をつくっており、今から名  
 東側の造り出しでばく北(前方部寄り)の房  
 塗輪の一列と一つたぬに出土し、埴輪以外に大  
 から双脇輪状文家人物埴輪の一列と馬猪埴  
 塗輪へ相接すると力士像かの一列と馬猪埴  
 輪、器台、台付壺、高壙などの復元器が置か  
 小ていた。この方形区画の墳丘側にも人物  
 馬、猪などとの形象埴輪が立て並べられていた。  
 西側の造り出一でも、東側同様に内筒形  
 塗輪列内側に大甕、器台、壺などの復元器が  
 あり、人物、馬、鳥などの形象埴輪が立て  
 られ、方形区画内には人物、馬、鳥などの形象埴輪が立て  
 須恵器の器台、小壙付鉢、耳付壙、台付壺、  
 高壙、壙、土師壙、高壙、壺がならべられてい  
 二の地方の埴輪終末期の様相の一端が知ら  
 た。  
 といふ。(埴輪)伊達宗泰、保育社、五一  
 貢  
 井辺八幡山古墳  
 土師壙  
 云1782  
 素焼生の土壙  
 小林241  
 壙まだぬかな内  
 高壙  
 小林1084  
 足つきの壙  
 大塚1911  
 蓋  
 49  
 51  
 四個  
 520 こう書いてある  
 大ヒコキ